

11月1日(月)

Kuakini Medical Center with Prof Tokeshi

報告：反町 光太郎 (Bグループ)

---

ハワイ2日目の朝、・・・とにかく病院が動き出す時間は早い。Kuakini Medical Center エントランスに5:50に集合。座ったら今にも寝てしまいそうな状態の時に、元気なマチ先生が出迎えてくださった。本日はトケシ先生と family medicine の見学コース。その前にマチ先生が病院の救急センターを案内して



朝の待ち合わせロビー。皆、おねむです。

くださった。救急室センターは全部で16床搬送された患者は平均6時間以内にはこの病棟を出て一般病棟に上がるというのだ、そのせいもあってか、比較的ベッドは空いている印象だった。そこにカラフルなスクラブを着た若手 Dr とと思われる人たちが数名いた。聞くと彼らは Medical student であるという。学生の朝もとてつもなく早く、4時ころには起きて病院へ来ているのだという。患者の所見をまとめたり、検査結果を見たりと医者との区別が全くつかないようなことを

やっていた。マチ先生曰く、医学生には積極的に手技をやらすのだそうだ。そういう教育システムもあってか、学生、研修医は即戦力となってくれるというのだ。逆に日本から来た医者はなかなかそうもいかないとおっしゃっていた。ハワイ研修初日、なかなかシビアな意見からスタートであった。

そんなとき、コーヒー片手にトケシ先生登場。我々にもコーヒーを振る舞ってくれた。トケシ先生はコーヒーがお好きのようで、3杯程度飲まれていたようであった。しかも、そのコーヒーをもって回診スタート。トケシ先生が担当する患者を5~6人ほど回診して回った。各病室の前には何やら名前が入った立派なプレートが掲げられていた。患者の名前を示すにはあまりにも立派すぎるプレート。聞くとこのプレートはその病院を建設するにあたりスポンサーになってくれた方の名前が表示されているのだという。

トケシ先生の回診は特徴的であった。日本は立ったままの回診スタイルが一般的ではあるが、トケシ先生は、コーヒー片手に患者の病室に行き、おもむろに椅子に座り、まずはちょっとした世間話的な話から始めることが多かった。患者はほとんどが日系の方々であったが当然会話はすべて英語。疾患も family medicine だけあって多岐にわたっていた。そして突然、トケシ先生は我々にも

英語で患者の状態を話し始めた。何となくわかる単語はあったものの全体として理解できたのは約3割。言葉の壁を痛感した。

5~6人の回診を終え、ちょっとブレイク。トケシ先生は我々に医者のあるべき姿についてレクチャーして下さった。ここでトケシ先生の教えをいくつか紹介する。

- ① 医者とは Servant（召使）である。決してえらい存在ではない。患者への言葉づかいも細心の注意が必要である。
- ② 医者の身構えで重要なのは「無構え」であるということ。無構えの方が患者は飛び込んできやすいからである。しかし、無構えの内心ではしっかりとした構えは必要である。
- ③ 「Eating and Sleeping is optional.」食べる、寝るという行為は時間があるときにするものである。患者のことを差し置いてすべきことではない。
- ④ 医師の行動規範 礼：一緒に働いている人々、自分にこのような能力を与えてくれた先祖、医療器具、我々を取り囲むすべてのもの、人に感謝の気持ちを持ちなさい。 知：毎日勉強！！21世紀は物事の変化が激しい時代である。 信：自分を信じる。情熱を持ち続けることが大事。
- ⑤ 医師がしてはいけないこと 驚：驚くのではなく、冷静に。 惑：文字通り 怒：怒った瞬間、その時点で理性は失われている。これは死を意味するのだ。
- ⑥ 時間が足りない時の対処法→睡眠時間を削る。金縛りが出るほどであったという。
- ⑦ トケシ流言葉の壁の乗り越え方：皆が遊んでいるときもひたすら勉強。授業を予習していたため medical term に関しては苦戦しなかった。

高々30分程のレクチャーであったが、なんだかものすごく心が洗われた感じがした。

8:30病棟での朝の業務を終え、隣接するビルにある自分のオフィス（診察室）にて外来診療が始まった。オフィスにはいくつもの診察室が用途別にあり、小児用、耳鼻科用などといった感じで分けられていた。病院とは違いトケシ先生のオフィスはすべて電子カルテ。来院した患者情報はすべてポータブルのノートパソコンで管理し、来院した患者情報が受付からそのパソコンにその都度送信される仕



病院の前でトケシ先生とともに。

組みになっていた。受付の事務の方が適宜診察室に患者さんを案内し、その部屋にトケシ先生がポータブル電子カルテとともに行き来する。そこで診察を行い、結果を自分の部屋（日本刀などが飾ってあるプライベートルームのような部屋）で説明するといった診察スタイルであった。了承を得た患者さん



の診察風景を見学させてもらったが、診療の最初は恒例の世間話から。ある程度打ち解けてきたら電子カルテのフォーマットに沿って問診→診察と進めていった。驚いたのはすべての部屋に眼底鏡と耳鏡が設置されており、すべての患者から眼底、耳鏡所見をとっていたことであった。我々も診察をさせていただく機会があったのだが、なにせ眼底鏡を使ったのは4年生のOSCE以来で当然うまく当てられず、光の焦点が瞳孔から外れているのを見て「ちゃんと見てないでしょ…」と静かに突っ込まれた。他にも口腔内観察や聴診などの診察をさせていただいたが、どうやら我々の診察はいい加減だったようで多少あきれている様子うかがえた。身体診察の基本を改めて教えていただけだったのでとても良い機会であったが、日々の病棟業務でいかにいい加減なことをやっていたのかと深く反省させられた。

診察見学の承諾をいただけない患者も多く、また診察室もそこまで広くはない



ため2人1組で交互に見学となったこともあって待ち時間もそこそこ多かった。トケシ先生の診療は昼を過ぎても続き、我々は14:00頃にいったん解放され病院のカフェで昼食をとることにした。どんなところだろうと期待して行くと、そこにあったのは豆腐ステーキのようなおかずとライスとよくわからないスープのみ。一応セルフ方式にはなっているのだが、行った時間が遅かったせいか、選択肢がこれしかなかったのだ。味は正直いまいちではあったが空腹を満たすにはぎりぎり許容できる感じであった。オフィスに戻るとトケシ先生が開口一番「まずかったでしょ？」と。味覚は

やはり日本人である。

午前中に救急搬送された人がいたらしく、その患者の回診について行った。どうやら低Na血症で搬送された中年女性で、すでにレジデントが問診から検査までひとしきり終えており、患者状態も安定していた。トケシ先生は担当したレジデントから状況を聞き、患者からも話を聞いていた。どうやら、Na急速補正に伴う



橋脱髓のことに触れた話をしているようだったが、私レベルの英語力では4割くらいしか理解できなかったのが実に悔しかった。

そして、再びオフィスへ。するとそこに、どう見ても何かを患っているとは思えないハワイアン美女がトケシオフィスに入り椅子に腰かけ、何やら疫学的な話をハイテンションに話し始めた。トケシ先生は聞いてはいるもののどこか受け流している感があり、その美女はひとしきり話し終わると飛び切りの笑顔と愛想を振りまきながら早々と立ち去って行った。なんと製薬会社の方だったようで、薬の宣伝に来たとのことだった。日本とのギャップはここまでもあるのかと感じさせられた一幕だった。

患者を一通り診察し終え、我々に聴診器や打診の起源について話してくださった。これだけ深い歴史があるもの、敬意をもって扱い、行わなければならないといけなことを教えられた。時刻はすでに夕方。外科コース見学ของกลุ่ม



オフィス内の刀コレクション

と合流し本日の見学は終了。朝早かったこともあり、疲れは多かったが、この日の dinner のロコモコのおいしさに最高に癒されたのは言うまでもないだろう。ハワイ2日目、終了。